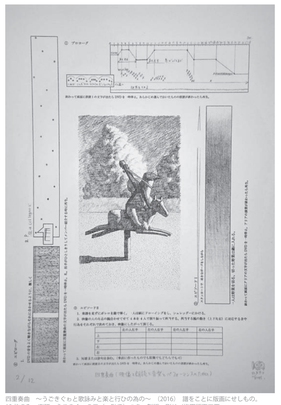
分枝 *branching*

http://branching.jp
branching 18 publish : 09.September 2016



四重奏曲 〜うごきくさと歌詠みと楽と行の為の〜 （2016） 譜をことに版画にせしもの。12 枚のみ、楽譜、うごきくさの語 （一DVD）つき、製版・刷り／梅田版画工房

たかはしびわ Biwa Takahashi
歌家
1972 年東京都生まれ 長野県在住
長野二紀会会員 日本ペンギン交流員
1997 武蔵野美術大学油絵学科卒業 2006.7 〜「語刊さくだいら」にて「さくだいら美術探訪」隔週連載（2008 年 7 月から 4 週に一度の掲載）2007 信濃毎日新聞短歌欄イラスト担当
たかはしびわのページ http://takahashibiwa.web.fc2.com

個展 2016 年 10 月 8 日〜16 日 Gallery6 呼（新潟県十日町市）
第 70 回記念一紀展 2016 年 10 月 12 日〜24 日 国立新美術館（東京都六本木）
個展 2016 年 11 月 2 日〜30 日 アリコ・ルージュ（長野県飯綱町）

あたらしき曲の調べを為せしことに就いて

Biwa TAKAHASHI 1972 –
たかはしびわ

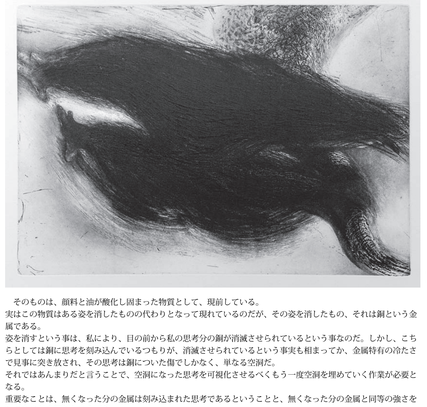
軽井沢迫分の油や、丸売り処（＝ぎょらいい）一進にて、水無月二十三日より二十七日まで、妻と二人の表を飾りき、二十五日には我が作りし曲「四重奏曲 〜うごきくさと歌詠みと楽と行の為の〜」の調べを為しき。
曲の譜には三つの種を用みき。五線譜、図形譜、うごきくゃ（＝映像）なり。譜と別に歌詠みの文も用みき。此度は立原道造、日原正彦、谷川俊太郎作。前口上、歌詠みの一、語らくの一、語、語らくの二、歌詠みの二、納めの口上、の七つに分かる、合はせて三十分ほどの曲となりき。
調べ為しき日には、我らの思ひしよりおほきかたがたこそいでましし給ひ、立ち並びて御覧し給ひける、まことありがたきことなれ。
我褒められど良きところある曲なり。殊にうごきくさゃと合はせし「語らくの二」は出来なり、また五線譜に書きし「語」の、横笛、大提琴の楽の冴き美しきも良し。
我らの調べのさまは、汝が筒（＝ゆうちゅうぶ）にて御覧たまへ。

https://youtu.be/2BHs6SL1Emo

調べのさま

黒い、考察。

Masami YOSHIMURA 1973 –
吉村正美



Copperplate (5200 mm x 3600 mm) engraving 2016
deep etching print / Masami Yoshimura

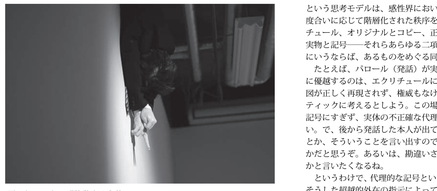
そのものは、顔料と油が酸化し固まった物質として、現前している。
実はこの物質はある姿を消したものの代わりとなって現れているのだが、その姿を消したものの、それは鋼という金属である。
姿を消すという事は、私により、目の前から私の思考分の鋼が消滅させられているという事なのだ。しかし、こちらとしては鋼に思考を刻み込んでいるつもりが、消滅させられているという事実も相まってか、金属特有の冷たさで見事に突き放されて、その思考は鋼につめた傷でしかなく、単なる空洞だ。
それではあんまりだと言うことで、空洞になった思考を可視化させるべくもう一度空洞を埋めて作業が次へと繋がる。
重要なことは、無くなった分の金属は刻み込まれた思考であるということと、無くなった分の金属と同等の強さを持つものが必要だという事だ。

そこで、私の思考と金属の強さを可視化できるものを使うことになるのだが、選んだのは黒という色である。
黒というものは、殆どの光の波長を反射せず、光を吸収してしまう。人間の可視領域に於いて、感得されないその状態が“黒色して見える”と言う事なのだ。そして、光というエネルギーを吸収すると熱を生む強い色である。
ただ、人間に感得されない状態が黒色して見えるというのならば、黒色は見えているようで、実は見えてはいないとも言えるのではないか。しかし、黒という色の物質として現前している。どうやら黒は、見えとは、を改めて考えさせる色である。
鋼の空洞に埋められた黒色、その黒色は見えているようで、実は見えていないかもしれない。しかし、物質として現前している。
その黒はまた、距離をとると空洞として見えてくる。また、空洞は距離をとると黒として見えてくる。光が届かない場所は、黒のみ感じることができるというわけだ。
私の思考で黒を使うのは、光の届かない場所、奥底を感じる事ができるからである。

吉村正美 Masami Yoshimura
1973 年長野市生まれ
画家・銅版画作家
多摩美術大学にて版画を学ぶ
大学院在学中より 制作活動に放送活動が組み込まれ、以後除々に放送活動へ比重がふえ、遂には制作活動が止揚になる。2007 年現在、
http://masamiyoshimura.com

貞子講義

Yosuke HATTORI 1976 –
服部洋介



耳のないマウス「移動する主体」
2016
『箱のなかに入っているのはどちらか？』展より
「カタツムリ」のヴァリアント『移動する主体』の一部
3331 Arts Chiyoda（東京）
（耳のないマウスの web ページより）
写真 / 石村和明

という思考モデルは、感性がいかなる様々なレベルで適用され、現前の度合いに応じて照射化された枠序を形作っている。
ドキュメンタリー、ドラマ、ニュース、報道、無線と有線、実物と記号――それらあらゆる環境は、内部と外部をめぐる争い、闘的にいうならば、あるものをめぐる同一性と差異をこそが実体問題の核心だ。
たとえば、バロール（発話）が実体としてエクリチュール（テキスト）に優越するのは、エクリチュールには誤記や誤写が入り込み、発話者の意図が正しく再現されず、極或なりは精度にも欠けるからだとプラグマティックに考えるとしよう。この場合、書かれたものは、実体が次元たる記号にすぎず、実体の不正確な代理物として差異や誤謬を発生させかねない。で、後から発話した本人が出て来て「俺はこんなことは言っていない」とか、そういうことを言い出すのである。いや、おまえの記憶の方が不確かだと思う。あるいは、勘違いさせるような発言でもしたんじゃないのかと言い合いたくなる。
というわけで、代理的な記号というものは、実体というより実物というか、そうした超越的外在の指示によって内容を規定されているのであって、記号だけでは意味をなすことができない。道路標識にしても「これは一目散のマーケットです」と交通教本に明記されているからこそ、そこに「右折禁止」などはなく、何年もの間、かつては外在に過ぎなかった「ざるこ」がこうしてあるべき、祖父はどんなことを思い、藤巻青てたのか、自分が育てた藤の花を一度でも見たかったのだろうか、言わずもがな私はその後も、祖父の心の機微を尋ねることはできなかった。
時は流れ祖父も親父もこさき、私も子を持つ親となり、我が子らの未来に想いを馳せるふる地を知った。義父の家に居て藤の花を眺めながら、祖父が育てようとしていた藤棚を思う。子供達がおじいちゃんと戯れ合う子ケラと半高い笑い声を聞きながら、赤城の吹き下ろしの風に揺られて藤がまた、惚れ惚れするほどの魅力を放っていた。

陷ころ餅

Sayoko FUNABASHI 1984 –
船橋小夜子

まるまって、陷こ
る餅みたいな気分。居
も居なくてもどちらでもよい。
良く捉えれば空気みたいな存在だ
何をしても何も手につかず淋しい
気が縮小していって、しゅーっ
と音を立ててずっぷり重い
陷ころ餅になった

船橋小夜子 Sayoko Funabashi
1984 年青森県八戸市生まれ・東京都杉並区在住
クリエイター
2007 年 東洋大学社会学部 社会文化システム学科 卒業
2009 年 美学デザイン研究所 卒業
学生時代より IT コンテンツ企画にてモバイルサイトデザインを制作。
その後、民間活動要員を経て、WEB 関連企業でデザインをしながら
フリーランス・クリエイターとして活動。
info@funabashimisako.website
http://funabashimisako.website/

キッチン (四) ー命のバトンー

Yui MIFUNE 1972–
三船ゆい

真っ白に真っ平らに広がった空間に
子供達が絵を描き始める
思い思いの
そこにまだ かつて見た風景を見つけ出したか？
新しいと感じるのは何故だろう？
思い思いその前に
私の節穴分替わりだったその言葉を
・「これは運命なんだよ。」
・「自分が思いと思う事はしなければいけないんだよ。」
・「家の中の事は決して人には言ってはいけないよ。」
小さな小用が、これから渡る大きな海を前に握りしめていた三つの御守り
言葉は一人歩きして
誰のためにもなってくれる
そう思って、此処に明かしてみる
母にとって、たぶん一番胃の深い年
彼女の命の灯は消えた
ああ
母とはいかに強い人であったか
自らを焼き尽くす強靭さ
厳格な月
静かな月の表面に降り立つ
聞こえもしない声を
無理やり引き出して
私は私の口を借りて応えた
「我が身は土である」
あるいは . . .
ヘルプ入ってのかもしれない
人は亡くなって初めて、その顔の裏側を見せてくれる
ほとんどは、私の方が世話を焼かせながらない
優しいお調子もの、可愛らしい母であった
一番好きな女将さんだったって
お花を習っていた仲間の人が言っていたよ
ごく親しい人が教えてくれた
もう一人の母
子供の頃外側のような一枚の壁
新しい芽を育む地平であると
「静」と「陰」を駆けずり回って探した
知性の土壌
小さな種の殻の中
このまま深く雪と大地に沈められるかもしれない
温かい子宮の、その中に永遠に
母のじくなった時も
人というのは不思議なもので
悲しいはずなのに冷静に目常をこなす自分がいる
若い頃は許せなかった矛盾も
そういう事もあるものだとわかるようになる
やみくもに答えを探すより
彼女がいつも私に向けていた笑顔を
命の記憶
私の真実は私の中にある

ー完ー

三船ゆい Yui MIFUNE 1972 年生まれ
長野県山ノ内町在住 自営業

鬱

Kazuya OSAME 1971 –
納和也

2010 年の 7 月頃長野と東京を通勤往復していた頃最終の新幹線で長野駅に着いた時頃がくらっとして「おかしいな」とやり過ごしそのまま車に乗って飯綱の家まで向かう。途中考え事をしながら。もっとも悲鳴的な気持ちの考え事が頭点に達した時体中の血液が頭に流れ出した。そのまま運転が出来なくなり途中で車から降りて過呼吸が治まるのを待った。治まりはしないがそのままだましだまし綱渡りのように車を運転し家にたどり着く。これがすべての始まりだった。そこから薬と共に暮らす日々が始まった。レンドルミン、メイラックス、レボトミンと薬を処方してもらった。薬の副作用で昼間眠くなり仕事も出来なくなった。会社を休職しそのまま年を越した。何とか仕事が出来るのではとトライをしたが 1 時間もパソコンの前に座ってられなくなった。休職期間があけ昼飯を同僚と日比谷まで歩いに行った帰り地下鉄日比谷線を降りたら東日本大震災が起きた。会震が夜中まで続きその日は心療内科の診察日で医者に向かうと先生他看護師の方々、家に帰るめどがたたない状況を話されてしまった。その日は会社には帰宅した。その翌日会社から病気で使い物にならないという事で退社勧告を受けた。ただ会社の外注として仕事をくれると言う事。会社を辞めて家で会社の仕事を受け仕事を進めるが休職が原く失敗を繰り返しやがて切られた。身体が言う事を聞かないのだからどうにもならない。眠気が半端ない。やがて東京に通えなくなり医者を長野県有数の心療内科に変える。長野市内の心療内科の窓口をうろのみちにし気が付くと 10 種類以上の薬を毎日飲む事になった。怖いことに薬に体は慣れて眠気は治まってきた。薬を飲んでいれば日常生活は問題なくなった。しかし飲まないと禁断症状が出て不眠、震え、不安感が一気に押し寄せる。無知だった頃薬を 2 日分 1 日に飲んでしまい翌日薬がない状態を経験した。地獄だった。薬で平穏を保つ毎日が始まる。そのまま 5 年経ま増え続けはぜ薬まで行の毎日が長く。
しかしここで転機が訪れる。今年に入り最初に駆け込んだ東京の心療内科に行ってみたのだ。すると先生が「これはこのまま続けると痴呆症になる、出来れば月一回でもいいから通わないか」と言われ自分でも現状の薬の多さに今頃はっと気付かされたのだ。決心をし心療内科を元の東京の心療内科に変えた。薬はみみみる減っていった。何ど減らすと治るのだ。身体が治ってくると薬の飲み始めの頃のような眠気が強烈に。変すると薬による身体の麻痺が改善してきたのだ。そこで先生は徐々に減る薬を減らしてくれた。すると眠気がなくなり食欲が復活し身体に血液が回り始める実感が湧いてきた。良かった！しかし、心療内科を東京に変えてすぐに鍼灸院の調師の仕事を頼まれた。行って調師の実習を行い家に帰り眠り朝になったら寝ぼけていた。相当に実習が辛かったのだ。そのまま寝ぼけ鬱が発症した。せっかく良くなって来たのに！ここでこじらせたら大変なことになる。状況を東京の心療内科の先生に話した。東京の心療内科の先生は毎回 30 分カウセリングをしてくれる。だから自分の身に起きることを踏まえて適正な処方をしてくれる。身体はの微である。いつ急変してもおかしくない。ただ、薬に頼いタイミングで東京の心療内科に変えて良かった。しかし職業訓練校の調師の仕事で自信を大きく喪失し仕事道具であるパソコンを開くのが怖くなる症状が出て今も続いている。4 ヶ月この症状に悩まされている。こういう症状は薬だけでは治らない。しかしにカウセリングを時間をかけてしっかりとしてくれているおかげで心が楽になっていく。光の指針も示してくれる。本当にありがたい。長野市内の心療内科の診察時間は 1 回 5 分である。東京の先生が言うからはこれが現在の標準時間らしい。これでは話にならない。これではすべて薬だけでは治りっこないのだ。鍼灸院の調師の仕事を知る事が出来た。とにかく焦ってはいけないと自分に言い聞かせている。じっくりと。

納和也 Kazuya Osame クリエイター
1971 年埼玉県熊谷市（旧妻沼町）生まれ
http://osamekazuya.com

2016 年 9/10,9/23 ナガノオルタナティブ「ランドスケープ」外伝ライブ
フラットファイルスラッシュ直廊ギャラリー

水簾砂

Reiono MORITA 1956–
町田哲也

「信州は天国！」と言うような言葉が、信州出身の人の口から出て来ることは、しばしばあるが、「信州は地獄！」と言う言葉を聞いたことがあるだろうか？
信州の人間は、相互助け合いの精神が強く、人情に厚く、温かい。
しかし、信州は、地獄である。
信州の人間は、相互助け合いの精神が強く、人情に厚く、温かい。
しかし、信州は、地獄である。
「そうやさろてしようよ、まだまだ、生かさないといけないよ。」
「はいはい、生かさないよ。」
「はいはいって、言ってるだけじゃ、生かさないよ。」
「はいはいって言ってるだけじゃ、生かさないよ。」
「はいはいって言ってるだけじゃ、生かさないよ。」
「はいはいって